

豊川水系 内外水統合型水害リスクマップ の公表へ向けて

令和8年 3月 6日

国土交通省 中部地方整備局

豊橋河川事務所

1. 多段階の浸水想定図と水害リスクマップ(本川氾濫のみ)

- 国土交通省では、土地利用や住まい方の工夫の検討及び水災害リスクを踏まえた防災まちづくりの検討など、流域治水の取組を推進することを目的として、発生頻度が高い降雨規模の場合に想定される浸水範囲や浸水深を明らかにするため、「多段階の浸水想定図」及び「水害リスクマップ」を令和4年9月30日に公表しました。
- なお、現在の多段階の浸水想定図及び水害リスクマップは、国管理河川の氾濫のみを示しています。

<多段階の浸水想定図と水害リスクマップについて>

[多段階の浸水想定図]

- 公表済みの想定最大規模に加え、より頻度の高い複数の年超過確率毎に多段階の浸水想定図を作成。
- 今回作成した多段階の浸水想定図は以下の年超過確率の図面。

【豊川水系】1/10・1/30・1/50・1/100・1/150

<豊川水系 多段階の浸水想定図>

河道条件	降雨の年超過確率				
	1/10	1/30	1/50	1/100	1/150
現況 (令和2年度末時点)	●	●	●	●	●
短期整備後 (令和7年度末時点)	●	●	●	●	●

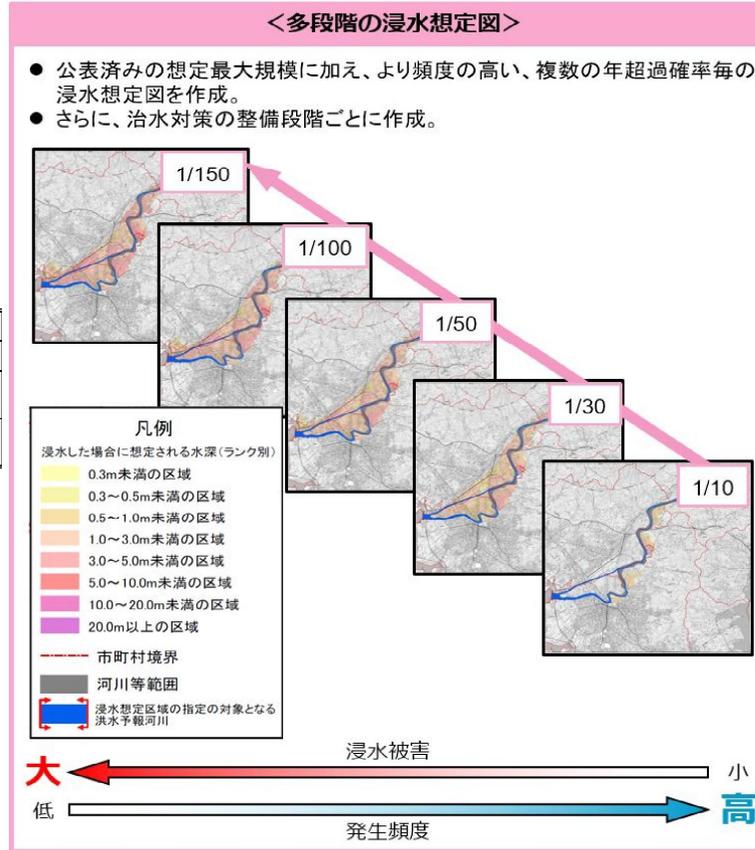
※—：浸水が発生しないことを示します。

[水害リスクマップ]

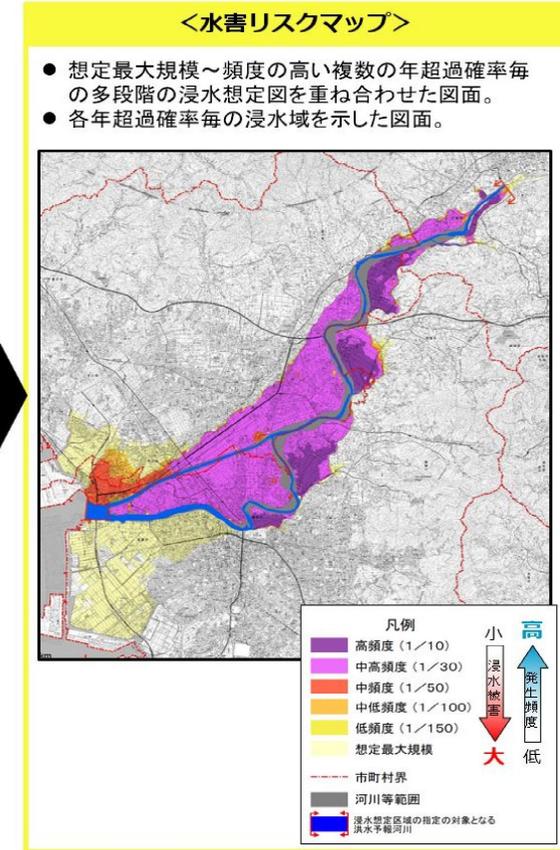
- 水害リスクマップは、1/10～想定最大規模降雨の降雨により浸水した場合に想定される多段階の浸水想定図を重ね合わせた図面。
- 以下の浸水深毎に水害リスクマップを作成。
 - ・浸水深 0cm 以上
 - ・浸水深50cm(床上浸水想定)以上
 - ・浸水深 3m(1階居室浸水相当)以上

<豊川水系 水害リスクマップ>

河道条件	浸水深		
	浸水あり	50cm以上	3m以上
現況 (令和2年度末時点)	●	●	●
短期整備後 (令和7年度末時点)	●	●	●



重ね合わせ



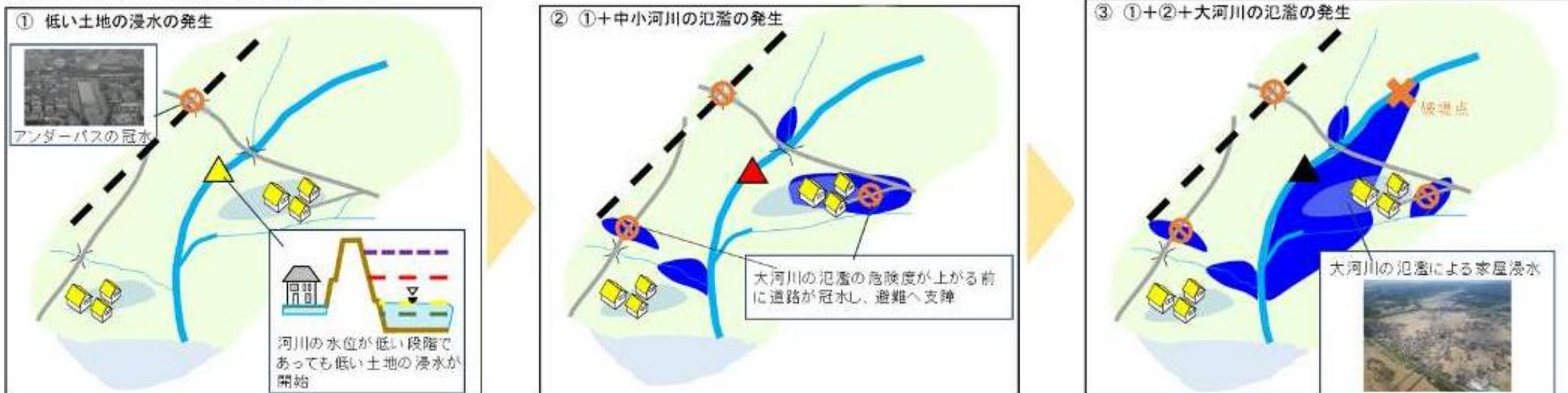
<水害リスクマップの活用イメージ>

- 住居・企業の立地誘導・立地選択や水害保険への反映等に活用することで、水害リスクを踏まえた土地利用・住まい方の工夫等促進
- 企業BCPへの反映を促進することで、洪水時の事業資産の損害を最小限にとどめることにより、事業の継続・早期復旧を図る

2. 多段階の浸水想定図(中小河川・下水道等氾濫)

- 現在、水災害のリスク情報については、各河川の洪水浸水想定区域図や、下水道等の雨水出水浸水想定区域図などをそれぞれ作成し、周知しています。
- 一方で、実際の災害発生時には、大河川の洪水時には既に中小河川や低い土地の浸水が発生している場合もあり、避難行動の遅れや適切な避難先の選択に支障を来たすおそれがあり、**内外水の氾濫の進行を含めた氾濫特性の全体像を把握することが重要**です。
- そのため、国管理区間の外水氾濫のみによる多段階の浸水想定図に加え、中小河川や下水道等からの内水氾濫についても、比較的発生頻度が高い降雨規模も含めた多段階の浸水想定図を作成しました。

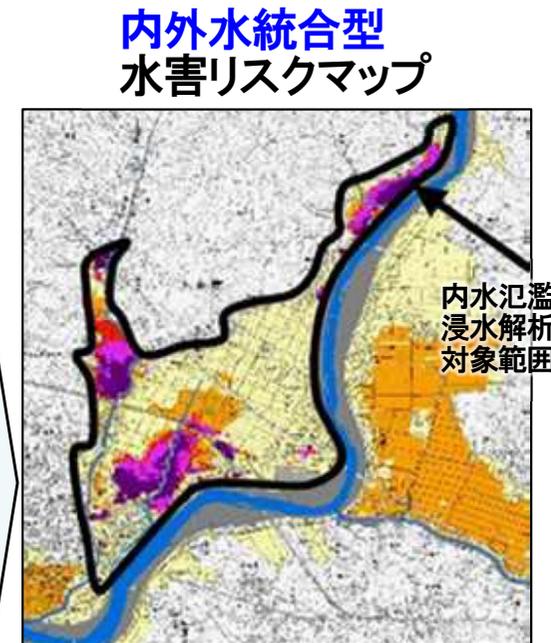
時間とともに進行する氾濫のイメージ



3. 内外水統合型水害リスクマップ

○ 外水氾濫のみの多段階の浸水想定図・水害リスクマップ(既往作成)と、中小河川や下水道等からの内水氾濫による多段階の浸水想定図・水害リスクマップ(今回作成)とを重ね合わせ、浸水範囲と浸水頻度の関係を図示した内外水統合型の水害リスクマップを作成しました。

■ 内外水統合型水害リスクマップは、外水・内水両方の浸水リスクに対し、**地点毎(メッシュ毎)の浸水頻度**を表示。
→中～高頻度の被害を軽減する減災対策(防災まちづくり等)の検討への活用を期待。

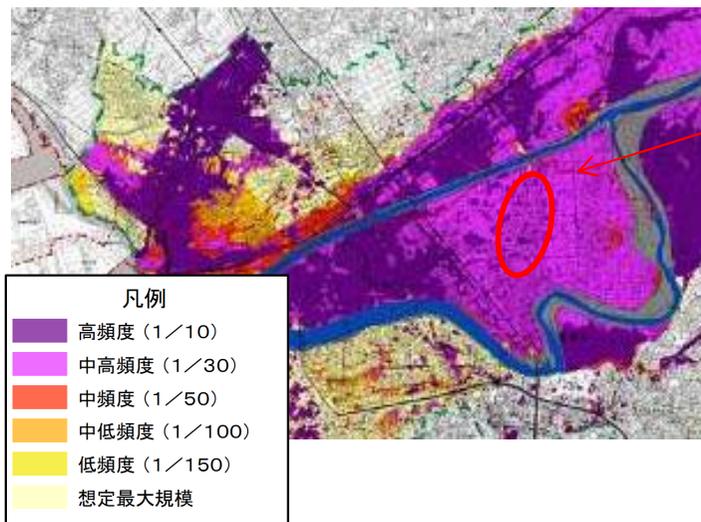


重ね合わせ
内水氾濫
浸水解析
対象範囲

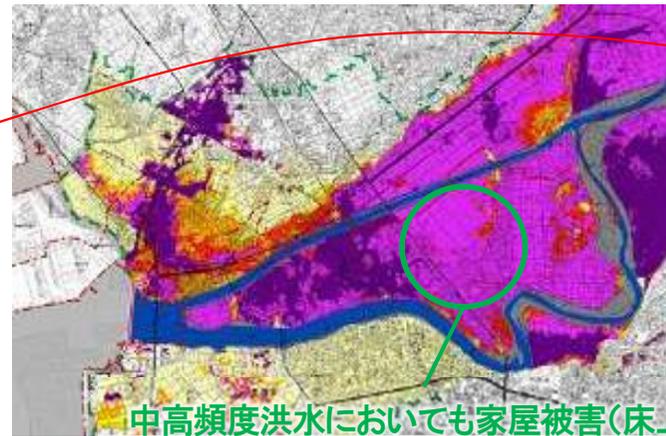
凡 例	
高頻度 (1/10)	中高頻度 (1/30)
中頻度 (1/50)	中低頻度 (1/100)
想定最大規模	

4. 内外水統合型水害リスクマップの活用例

- 水害リスクマップに示された浸水頻度の違いにより、中小規模の洪水でも比較的浸水しやすい場所を把握できます。
- また、水害リスクマップは、浸水深下限値(10cm以上(浸水発生)、50cm(床上浸水相当)以上、3m(1階居室浸水相当)以上)に応じて3パターンを作成しています。
- この浸水深下限値の違いにより、住まい方の工夫や立地選択、防災まちづくりへの活用等が期待されます。

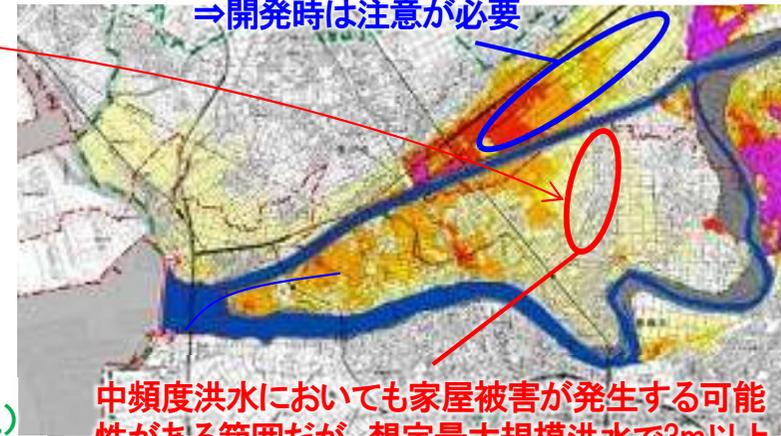


① 浸水が想定される範囲



中高頻度洪水においても家屋被害(床上)が発生する可能性がある範囲
⇒住まい方の工夫が望まれる

② 浸水深50cm(床上浸水相当)以上



農地部分では3m以上の浸水深となる
⇒開発時は注意が必要

中頻度洪水においても家屋被害が発生する可能性がある範囲だが、想定最大規模洪水で3m以上にはならないため、垂直避難が可能
⇒住まい方の工夫で被害軽減、安全避難が可能

③ 浸水深3m(1階居室浸水相当)以上

3つの図を並べて見比べる

【土地利用や住まい方の工夫に利用する場合】

- 1階をピロティ構造(1階を柱だけの空間にして、2階以上を居住スペースあるいは事務所等にする)にする等、浸水被害を受けない建物構造にすること等が考えられます。

【企業立地選択等に利用する場合】

- 浸水頻度の高い場所への施設の立地を避けるほか、浸水確率を踏まえて事業継続に必要な資機材、電源設備、在庫資産を2階以上に移動する、止水壁を設置するといった対策の検討に活用することが考えられます。

【水災害リスクを踏まえたまちづくり・避難所設置に利用する場合】

- 立地適正化計画における防災指針の検討・作成への活用等が考えられます。

4. 内外水統合型水害リスクマップの活用例

- 内外水統合型の水害リスクマップを活用することで、地域の浸水特性を踏まえた適切な避難行動の呼びかけへの活用が期待されます。(水防計画、地域防災計画や流域タイムライン等の改善)(行政)
- また、要配慮者施設の避難確保計画・訓練等への活用も考えられます。(地域、コミュニティ、企業)
- 住民の方々が地先レベルの水害リスクの危険度や取るべき避難行動の理解を促進するための活用も期待できます。また、防災行動計画(マイ・タイムライン)の作成時に参考情報として活用できます。(個人)

